

明日への Lesson

三重大学入試問題から

コミュニケーションを考える

つくば国際大学教授
入部明子さん

ある事柄が、事実関係は正しいのに、自分の気持ちとかけ離れて相手に伝わっている。そんな経験はないだろうか。2022年に三重大学が出題した入試問題は、入国管理局でのやり取りを通し、言葉の使い方とコミュニケーションのあり方について考えさせる内容だった。国の文化審議会で委員を務めたつくば国際大学の入部明子教授（比較国語教育学）と一緒に考えた。

三重大学は国語の入試問題で、作家・中島京子さんの小説「やさしい猫」（中央公論新社）の一部を取り上げた。

「やさしい猫」は、シングルマザーの女性「ミユキさん」と日本に住むスリランカ人男性「クマさん」をめぐる物語だ。不法残留容疑で逮捕され入管に収容されたクマさん。ミユキさんも交え、「特別審理官」から「口頭審理」を受けるシーンが引用された。

口頭審理は、強制退去の決定を受けた外国人が、異議があったり日本の在留を特別に認めてほしいと希望したりした時に、入管側にその理由などを説明する手続き。これを担当するのが「特別審理官」だ。審査の事実認定に誤りがないかや、在留を認めるべき理由があるかどうか

伝える力蓄え 言葉で自分を守る



入部明子教授
＝本人提供

を、当事者への面談を元に判断する。

「どうして結婚を申し込んだのか」「なぜプロポーズを受け入れたのか」「配偶者ビザを彼にあげよう

「正確さ」「ふさわしさ」…4要素目的に応じバランス

そのうえで、入部教授は「言葉によるコミュニケーションは自分を守るためのツールだ」と説明する。

文化審議会国語分科会は18年3月、「分かり合うための言語コミュニケーション」という報告書を公表した。「正確さ」「分かりやすさ」「ふさわしさ」「敬意と親しさ」の四つの要素を意識し、「目的に応じて優先順位やバランスを調整すること」を提言している。

たとえば、こんな場面を想像してみよう。苦手な上司から食事に誘わ

と思ったんじゃないのか」

特別審理官はこうした質問を2人に投げかけ、2人は事実を答える。詰問と受け取れる口調で質問を続け、2人の説明を異なる言い回しにしてたまたみかける。これに対し、事実ではあるが違和感を抱くミユキさんの心理が描かれる。出題ではそんなシーンが抜粋された。

入部教授は、出題の意図を「ミユキさんやクマさん側には国語力として

不足があり、特別審理官にはコミュニケーションのあり方に対する考え方に不足がある。『これではいけない』ということを考えてほしいかっただけ」と推測する。

2人の対応について「特別審理官に『それは、あなたの考えですよね』と当然言ってもいいシーン。そういうことも、コミュニケーションのあり方について知っていれば反論できたのでは」と語る。

このように、状況に応じて四つの要素のバランスを調整することで、コミュニケーションが円滑になることがある。

コミュニケーション力の必要性は、09年から始まった裁判員制度によっても高まったという。裁判員として刑事裁判に参加する市民は、裁判で語られることを理解し、評議で自身の意見を述べなければならぬ。これは自身の意見を述べなければならぬ。これは自身の意見を述べなければならぬ。これは自身の意見を述べなければならぬ。

「今日は都合が悪いのでせつかくですが失礼します」と答えたらどうだろう。本音を隠しているため「正確さ」は小さいが、「ふさわしさ」や「敬意と親しさ」の要素を含む。相手を傷つけずに「断る」という目的を達成することができる。

「断る」という目的を達成することができる。

とにもつながる」と指摘する。

18年に改訂された高校の学習指導要領では、実社会に必要なコミュニケーション力の育成を目標とした科目が設置された。「言語コミュニケーション力」はすぐに身につくものではないから、中学校や高校で力を入れていくべきだ」と話す。

入試問題に話を戻そう。「出題されたシーンは、特別審理官の一方的な姿勢に怒りを感じ『自分だったらこう身を守りたい』と思ったとき、はたと、『自分にその力があるか』と問う問題だったように思う」と入部教授は言う。

ネットによる中傷、性自認や性的指向に対する差別、不安定な世界情勢、物価高騰による生活への影響……。トラブルに巻き込まれたり、理不尽な仕打ちを受けたりすることは人ごとではない。自分を守るため、声をあげなければならぬ日があるかもしれない。

入部教授は「そんな時のために、意見を伝える力を蓄えておく。コミュニケーションを正しく捉え、国語力を鍛えていくことが大事です」と力を込めた。

（大野晴香）